

「落語と私」 その式拾四

三代目 橘ノ百圓

明けまして、お目出とうございます。1年経つのは早いもんで、この挨拶も3度目となりました。サテ今回は、秋の噺ですが、その前に、前回「千両みかん」を取り上げましたが、私、落語を演る関係で、良く「一両は、今のお金でどのくらいですか!」テな事を訊かれます。一両は今の価値にしますと、マア時よっての変化も在りますが、私は約十万円と思っています。この千両は、富籤の噺に幾つか出てきます。皆一番富の千両、一億円! 解り易いですネ。江戸時代、八千文が一両、テ事は、一文が二十五円“二足三文”安い品の代表的表現ですが、草鞋が二足で七十五円、「時そば」のシッポク(かけそばの様な物)が十六文、四百円、大工の手間が八百文テ事は、1日二万円、マア今の物価に近いかな!? 昔の時代劇で、二枚目役の侍が、腰掛け茶屋で茶代を置く時に一両出して「姐さん、釣は要らねエヨ」高々四文(百円)の茶代に十万円出して・・・バカじゃないのテな事を思ったもんです。

話しを戻しまして、秋の落語ですが、先ず皆さんの頭に浮ぶのが「目黒のさんま」ですネ!? この噺は、誰でも知っている秋の噺の名作です。各々の噺家さんが、それぞれの工夫で演じてますが、あの「さんまは目黒にかぎる」の落ちを変える人はいません。これは見事な仕込落ちです。空が限りなく高い秋の武蔵野を、近習四、五人を従えての野馳、気持ち良さそうです。殿様の思い付きでの出発ですから、若侍達は、ほぼ何も持たずに後を追ッ馳けます。弁当の支度が無いのは当然! この辺が落語の仕込で面白いです。これに似た噺で「ねぎまの殿様」が在りますが、今は余り演る人は居ませんネ。秋の落語が「目黒のさんま」で終っては、少々情け無いので別の噺をと思うのですが、中なか無いのです。落語の四季を解説する本では「時そば」「死神」「野ざらし」等、ただこれが秋だ! 感が少ないのです。「時そば」では、竹輪麩の薄さを表わすのに「向うの朧月が透けて見えるヨ」テな台詞も在りますし、「死神」は、噺の始まりに、女房が帰って来た亭主をつかまえて「金の工面は出来たのかい!」これは暮の会話かな。テな疑問も残りますので。「野ざらし」では、訪ねて来た八五郎に先生が、釣場の寂しさを表わすのに「四方の山々雪溶けて、水嵩まさる大川の・・・」これは春ですよネ。私は別に噺にケチをつける積りは無いのですが、読者の方にツツ込まれても困りますので! そこで無理に「宿屋の仇討」を選びました。

これは大阪根多で、江戸では「庚申待ち」として演じます。この「庚申待ち」は五街道



神奈川宿

「東海道五十三次の内神奈川 台之景」 広重画

出典: http://ginjo.fc2web.com/167yadoyanoadauti/yadoyano_adauti.htm

雲助師のを聴いだけで、他に演る人を私は知りません。大阪名は「宿屋敵」です。

東海道3番目の宿場、神奈川宿の旅籠に、江戸の一刀流の指南、万事世話九郎なる侍が一夜の宿を求めるところから噺が始まります。その後に来たのが、江戸ッ子の脳天気な3人組、宿を探す辺りから一騒動おこそうと言う連中、この3人組と侍が隣り同士の部屋になったのが間違いの元で、3人組が芸者を呼んで、飲めや唄えの大騒ぎ、隣の侍は、宿の案内に出た伊八を呼び



出典：<http://sakamitisampo.g.dgdg.jp/nozarasi.html>

つけ「拙者泊りし折、その方に何んと申した。昨夜は(中略)今宵は、間狭な部屋で構わぬから、静かな所でユックリと休みたいと申した筈だ。しかるに何んだ隣の騒ぎは、これでは休む事が出来ん」伊八は直ぐに隣の騒ぎを鎮めるが、次に大阪で見た相撲の話しを始める。これが又、仕方噺となってドタンバタン、揚句の果てに投げられた男の足が、唐紙を蹴破って隣の座敷へ・・・「伊八、伊八、拙者泊りし折その方に何んと申した・・・」再び伊八の説得で静かになるのだが、3人で大人しく話しをしている内に、中の1人、鬼瓦の源兵衛なる者が、3年前に興した大事件を告白する。「俺が体を壊して草津の湯治場へ行く途中、高崎に居る叔父貴の所に顔を出すと、水が合ったものか、体の具合がスッカリ良くなって、叔父貴の商売の小間物屋を手伝う事になったと思え、そのお客の中に、高崎藩の殿様のお手を取ってのご指南番、三浦忠太夫、その奥方が家中きっての器量よし、ある日の事、その奥方に想いのタケを打ちあげられたと思え」「思えない、そんな良い女が、お前エなんぞに」「だから言ってるじゃネエか。色事は面、形じゃ無エって、それから亭主の留守に何ん度か逢っていると、忠太夫の弟に見つかって、それが為に奥方と、その弟を殺して、そのまんま逐電して3年経って今だに分らねエてんだヨ。どうでエ、色事をするならこのぐれエの事を遣って貰いてエナ」「エッ！源ちゃんは悪党だネ。源ちゃんは色事師だネ」と2人が囃子たてて騒ぎだす始末「伊八、伊八、拙者泊りし折、万事世話九郎と申したがあれは偽りの名、誠本名は、三浦忠太夫と申す者、三年以前不義者に妻、弟を斬られ、その仇敵を尋ねての旅である。伊八喜べ、隣座敷に居る源兵衛とやらがその仇である。拙者の方から踏ん込んで斬るか、奴の方から討たれに来るか!？」とこの侍が隣の部屋へ行くのを伊八が必死に止めたので「相分った。しかればこう致そう。明朝宿外れにおいて出合仇と致す(中略)他の2名の者も朋友の事故助太刀をするであろう、1名でも逃した折には主始め奉公人の首を刎るから左様心得ろ！」これは大変だと主、奉公人でこの3人を縛り上げると一晩中見張っていて、部屋の中は緊張の為静まりかえっている。朝となり伊八がこの侍を起し「宿外れは、西、東どちらになさいますか?」「何じゃそれは!？」伊八が合の襖を開けさせて「あの真中で縛られておりますのが、悪党の源兵衛でございます」「アッあれか、あれは嘘だ、洒落だ」「エッ!!何故その様な嘘をお付きになるのです!？」「イヤあのぐらい申しておかんと、拙者がユックリ休む事が出来ん」見事なトタン落ちです。次回の冬をお楽しみに。